

令和三年度
名寄市立大学
一般選抜 後期日程

小論文問題

試験時間 一〇時〇〇分～一一時三〇分（九〇分）

*受験上の注意

- ① 指示があるまで開いてはいけない。
- ② 指示に従って、静粛に行動すること。
- ③ 机上には、大学入学共通テスト受験票、本学受験票、筆記用具、消しゴム、鉛筆キャップ、鉛筆削り、時計、眼鏡、目薬、袋・箱から出したティッシュペーパー以外、不要なものは置かないこと。
- ④ 質問、用便その他、特に必要のある場合は黙って手を挙げ、指示を求めること。
- ⑤ 不正を行ったものは試験を中止し、以後の受験資格を失うものとする。

次の文章を読み、あとの間に答えなさい。

まずは、これまでと同じままの自分に新しい知識やスキルが付け加わる、という勉強のイメージを捨ててください。むしろ勉強とは、これまでの自分の破壊である。そうネガティブに捉えたほうが、むしろ生産的だと思うのです。

多くの人は、勉強の「破壊性」に向き合っていないのではないか？

勉強とは、自己破壊である。

では、何のために勉強をするのか？

何のために、自己破壊としての勉強などという恐ろしいことをするのか？

それは「自由になる」ためです。

どういう自由か？ これまでの「ノリ」から自由になるのです。

私たちは、基本的に、周りのノリに合わせて生きています。会社や学校のノリ、地元の友人のノリ、家族のノリ……そうした「環境」のノリにチューニングし、そこで「浮かない」ようにしている。日本社会は「同調圧力」が強いとよく言われますね。「みんなと同じようにしなさい」——それは、つまり「ノリが悪いこと」の排除です。「出る杭は打たれる」のです。

しかし、勉強は、深くやるならば、これまでのノリから外れる方向へ行くことになる。

ただの勉強ではありません。深い勉強なんです。それを本書では、「ラディカル・ラーニング」と呼ぶことにしたい。ラディカルというのは「根本的」ということ。自分の根っこのところには作用する勉強、それを、僕にできる限りで原理的に考えてみたいのです。

私たちは、同調圧力によって、できることの範囲を狭められていた。不自由だった。その限界を破って、人生の新しい「可能性」を開くために、深く勉強するのです。

けれども、後ろ髪を引かれるでしょう——私たちは、なじみの環境において、「その環境ならではのこをノってやれていた」からです。ところが、この勉強論は、あろうことか、それをできなくさせようとしている——勉強によってむしろ、能力の損失が起こる。

一般に、もの知りになると、大胆なことがやりにくくなる。

「昔はバカやったよなー」という遊びが、できなくなってしまう。かつては、仲間内の「ただのノリ」でバカをやるのは、素朴に楽しかった。その後、成熟して、可能性をさまざまに考えられるようになる、「狭い世界にいたんだ……」と気づいてしまう。しかし、狭い世界だったからこそ、エネルギーを圧縮して爆発させるようなバカができたのかもし

れない。

あるいは、お笑いの技術を勉強してネタの自由度が広がると、十分おもしろかったはずのネタが、ありがちなパターンにすぎないとわかってしまい、笑えなくなる。

自己流で歌っていたときの荒削りだからこそその迫力が、一念発起してまじめにボーカルレッスンを受け始めたら、だんだん失われてしまった。

こんなふうには、勉強は、むしろ損をすることだと思っただけ。

勉強とは、かつてのノって自分をおろそかに破壊する、自己破壊である。

言い換えれば、勉強とは、わざと「ノリが悪い」人になることである。

そんなことに踏み出したいと思っただけでいいか？

いまの生活でそれなりに楽しくやれている人は、ノリをおろそかに壊す勉強なんてまっぴらゴメンだ、と思うかもしれません。ならば、本書は不要なのだと思います。

本書は、無理に勉強を強いるものではありません。

人生においては、ときに、紆余曲折を経てたどりついたある局面が、「完成した」局面のようになることがある、と僕は思っています。そうなったら、微調整しながら、大きくは生き方を変えずに長くやっていきたい人もいるでしょう。

それに、不自由であることは必ずしも悪いことではない。むしろ、まさしく不自由が、縛りが、快樂の源泉になる。これは人間のすごいところだ。嫌なことを最低限にでも楽しもうとしてしまう——これを、「マゾヒズム」と呼びます。

人間は、根本的にマゾなんです。

完全な自由はありません。私たちはいつでも、周りから課される制約のなかで、不自由をマゾヒズム的に耐えながら楽しんで生きています。

不自由のなかで、なんとかサバイバルする。自分のこの人生は運命的なんだ、気合いでやるしかない、という信念が支えになるときもあるでしょう……それは、良い悪いの以前に、マゾヒズムであると言える。いわゆる「根性論」とは、強力なマゾヒズムにほかならない。

しかし、あるとき、「別の可能性」を考えなくなるかもしれない。考えざるをえなくさせる出来事が、何か起きるかもしれない。マゾヒズムにも限度があるでしょう。限度を超えたストレスを受け続けているなら、どこかへ避難すべきです。しかし繰り返しますが、完全な自由はありません。だから、どれほど苦しくて、自由を求めて逃げ出しても、それは「耐えられる範囲で不自由であるような別の環境」への引越すをすることでしかあ

りません。

私たちは、あるマゾヒズムから、別のマゾヒズムへと渡り歩く――。

ともかく、この勉強論は、現時点で、生活を変える可能性が気になっている人に向けられています。それは、何かモヤモヤした願望だったり、あるいは、不満や、疎外感のようなネガティブな形のこともあるでしょう。

（「勉強の哲学 来るべきバカのために」 千葉雅也著 文藝春秋 二〇一七年より）

問 「ノリが悪い人」になるような「勉強」とはどのようなものか、あなたの考えを八
百字以上千字以内で述べなさい。